

まえがき

分野を超えた問題意識

「コミュニティ・デザイン」という言葉は、時代とともに対象やニュアンスを微妙に変えながら繰り返し使われてきた。あいまいさを積極的に許容する、ある種使い勝手のよい言葉かもしれない。二〇〇〇年代に入ると、まちづくりのソフトな仕掛け、人と人のつながりづくりといった意味で、盛んに用いられるようになった。手法としての有効性に注目が集まり、ビジネスとしてもさまざまな試みが生まれ、地域の福祉や活性化に貢献してきた一方、ともすると手段が目的化し、関心の外側にあるものへの気づきや、本来目指すべきことは何なのかといった議論が、置き去りにされやすい面もある。

本書の執筆者たちは、二〇一〇年度から二〇二二年度まで、同志社大学大学院総合政策科学研究科と大阪ガスネットワーク株式会社 エネルギー・文化研究所（略称CEL、前大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所）が教育研究協力の覚書を交わして取り組んだ「コミュニティ・デ

ザイン論研究」講座で、右記のような問題意識を心に抱えながら議論を交わしてきた。

授業の場は、人口減少、ポスト標準家族、貧困・格差、災害復興、多文化化など、社会の構造的な変化に関わる問題に対して、ローカルなコミュニティ・デザインの新たなあり方を模索する実践者たちと、政策科学、人間科学、社会学、建築学、事業構想学など、多分野の研究者が、受講生とともに学び合う場となっていた。期間は一四年に及び、さらに前史となった学部向けの三年間の授業「コミュニティ・デザイン論」を含めれば一七年に渡り、理論と実践の両面から、対話した講師は四〇名を数える。バックグラウンドの異なる者たちが出会い、実践哲学とでもいべき生き方や考え方に刺激を受け、それぞれの問題意識を共有してきた実感がある。節目節目で、講義録を再編した書籍やドキュメントを作成し、授業の枠を超え社会への発信にも取り組んできた。

流動化する社会のなかで

その間の社会の変動は激しく、各地で大規模災害が頻発し、スマートフォンやSNSの普及をはじめコミュニケーションや消費のあり方が様変わりし、新型コロナウイルスのパンデミックや国際情勢の不安定化など、先の見通せない状況に覆われている。改めて人間の共同性とは何か、コミュニティ・デザインとは何か、自ずから批判的に捉え直す必要性に迫られてきた日々

でもあった。そこで、長い時間軸を携えて、それぞれが向き合ってきた難問を俯瞰し、より多くの人とともに考える機会としたいとの思いから本書の構想が動き出した。レギュラー講師を務めた八名（渥美公秀、大和田順子、川中大輔、高田光雄、新川達郎、弘本由香里、前田昌弘、山口洋典）でワーキングを設け、長く同授業を統括した新川を座長（監修者）に、川中・弘本・山口が幹事（編者）となって、勉強会を重ねた。その後、版元を引き受けてくださったさいはて社の大隅直人代表を交えた編集会議を経て、執筆陣とテーマを確定。上記の八名に加え、ゲスト講師から筒井淳也の参加を得、計九名で、第一部「共生社会に向けての包摂／平等はいかにして可能か？」、第二部「むら・まちの持続／縮退はいかにして可能か？」、第三部「現代的な共同性／公共性の創造はいかにして可能か？」の各章を執筆した。併せて、各部のテーマと関わりの深い実践現場の最前線からゲスト講師の六名（アサダワタル、北川美里、宋悟、花戸貴司、原めぐみ、松原永季）にコラムの執筆をお願いした。

「コミュニティ・デザイン新論」というタイトルの伏線には、大阪ガスネットワーク株式会社社エネルギー・文化研究所発行の情報誌「CEL」(vol.123)に掲載した、新川と川中のインタビュー記事がある。弘本の企画で、流動化する社会にあって、新たな価値を生み出すコミュニティはどのように考えられるのかを、世代の異なる二人に問うている。その記事のタイトルが「コミュニティ・デザイン新論——「包摂か排除か」を越えて」で、本書のタイトルに一部を活用した。同記事の編集に尽力いただいた平凡社関係者にこの場を借りて感謝申し上げる。

以上が、本書の出版に至るおおよその経緯や動機で、前史を含め一連の動きに関わってきた弘本からかいつまんでお伝えした。以降は監修者の新川にリレーし、横断的な視野で本書の構成と要点をぎつとご紹介する。

弘本由香里

コミュニティ・デザインという難問

さて、コミュニティやコミュニティ・デザインについては、多くの議論があり、学問的にも実践的にも様々に議論されてきている。そのなかであえて本書を世に問うというには、私たちの覚悟はある。前述のように長年この問題をめぐって大学・大学院での講義や論文執筆、書籍の出版なども行い、私たちなりに都度都度の整理をしてきたつもりではある。とはいえ、「コミュニティ・デザインという難問」に正対して、改めてこれまでの経緯を振り返り、現代の文脈の中から生まれるはずの知見を明らかにする作業には、新たに問いかけるべき重要な意義があると考えている。前述した本書の構成に沿って、それぞれの問いと論点を略述しておきたい。一つには、コミュニティの基礎となる共同性をどのように構成していくことができるのかと

いう問いである。本書ではそれを解いていくための概念として「共生」（これ自体扱いにくい厄介な論点ではあるが）の観点から接近しようと試みた。そのために本書第1部では、コミュニティにおける共同性を支える組織とそのコミュニティ・デザインにおける共生の実現可能性が、社会的排除と包摂、ケアの配分ないし再配分、また異なる価値を持つ文化間の対立と共生という葛藤を踏まえ、現代社会の諸問題に触れつつ解き明かされようとしている。

二つには、現実にコミュニティが停滞ないし縮退していく状況にあって、そこにかかわる私たちの当為と可能性を問うことである。人が住まなくなる地域が生まれる一方で、そこにかかわった人々の間に、何らかの共同性を共有できるとき、私たちは内在的であれ外在的であれ、コミュニティとその未来にかかわる余地ができる。本書第2部の課題は、その時、私たちは何をなすことができるのかを問いつつ、未来を共に展望できる視座を求めることである。

三つには、以上のように解体していく社会と孤立する個人の中に、共同性と公共性を再び見出すことができるかという問いである。統制や管理、あるいは排除や抑圧ではない共生の道を見出すことができるかという問いでもある。つまり私たちの中に積み重なってきている文化的基層が手掛かりとなり、公共圏が形成され、異なる価値が共存できる現在と未来のコミュニティのデザインを探索することである。本書第3部はこうした問いへの挑戦でもある。

日常の中にある深い論点へ

以上の編集方針とともに、本書のもう一つの特徴は、実践報告をするコラムにある。各部での問いかけへの答えは、実は、各部に配置されているこのコラムにある。それぞれの実践が報告されているが、第1部の二つのコラムでは、共同性をいかに紡ぎ直していくのか、共生を現できるデザインをいかに試みているのかがよく示される。第2部の二つのコラムでは、都市であれ農村であれ、実はそこに育まれているコミュニティが、一人一人を支え、マチやムラを支えていることが示される。第3部の二つのコラムでは、かかわりを深め広げていくことでコミュニティが形成され、同時にその手立てがコミュニティ・デザインであることがよくわかる。

もちろん本書の問いかけと答えの一部は、序章と終章の対話の中にも深く織り込まれている。一見したところ、拡散した対話に見えるかもしれないが、その中に、そもそもコミュニティとそのデザインを語る必要があるのか、なぜ私たちはそれを問題にするのか、問題にするとしてもどのように考えようとしているのかを読み取っていただけののではないかと思っている。本書全体もそうであるが、コミュニティやコミュニティ・デザインへの平易な記述や、日常的な現象への平凡とも思える理解の中に、考え抜くべきたくさん論点と、その議論をしていくためのヒントが山盛りになっていると確信している。これらが読者諸賢と共有できればこれ以上

のことはないとも考えている。

「まえがき」を締めくくりにあたって、名ばかりの監修者として、これほどの書物に仕立て上げてくださった執筆者や編集者そのほか多くの関係者に深く感謝を申し上げたい。これらは本来「あとがき」において具体的に謝辞を重ねるべきところであるが、本書の冒頭に当たって、とりわけ本書の編集を実質的に担ってくださった川中大輔、山口洋典、弘本由香里の三氏には深い敬意とともに重ねて感謝を申し上げたい。三氏が協議を深め緊密に連絡し合いながら、本書の構成や論点を明確にし、執筆を督励してくださらなければ、出版にこぎつけることはできなかった。いささか個人的なことになり恐縮であるが、この二十数年来、共に議論し磨き合ってきた仲間であり親しい友人でもあるみんなとともに、本書を上梓できるといふかけがえのない機会をいただき、本当にありがたく、これ以上の幸せはないと思っている。

新川達郎

コミュニティー・デザイン新論

—

目次

序章 対談 —— 難問に向き合っていくために 18

新川達郎 × 川中大輔 + 弘本由香里

第1部 共生社会に向けての包摂／平等化はいかにして可能か？ 43

第1章 共生社会の基盤をなすコミュニティ政策とは？ 新川達郎 44

- 1 共生社会とコミュニティの考え方 44
- 2 共生社会はどのように捉えられるのか 45
- 3 共生のコミュニティは可能か、デザインできるのか 46
- 4 日本における伝統的共生社会の変化とコミュニティの課題 49
- 5 伝統的隣保共同の崩壊とコミュニティ政策 51
- 6 バブル崩壊と相次ぐ災害経験の中で社会的排除 53
- 7 「新しい公共」「共助社会」におけるコミュニティの再構築 57
- 8 共生社会のためのコミュニティ・デザインに向けて 60

第2章 共生社会を先導する市民性とは？ 川中大輔 66

- 1 「共生」とコミュニティ・デザイン 66
- 2 「共生」からの揺らぎ 68
- 3 「共生」の進展を阻むもの 75
- 4 「共生」のための学び 79
- 5 「共生」の場への踏み込み 88

第3章 共生社会を実現するケアのありかたとは？ 筒井淳也 92

- 1 共生の二つの側面 92
- 2 定義の問題 95
- 3 自立と孤立——共助を活かす公助のあり方 101

column 01 「ひぐさ」Minami ぐも教室の多文化的実践 原めぐみ 110

column 02 少女が自分らしく生きるために大切なこと 北川美里 120

——わかくきりビンゲの実践より

第2部 むら・まちの持続／縮退はいかにして可能か？ 129

第4章 集落の「尊厳ある縮退」とは？ 渥美公秀 130

- 1 はじめに 130
 - 2 集落の縮退という概念 133
 - 3 関係概念としての尊厳 137
 - 4 尊厳ある縮退を考えるために 139
 - 5 新しいコミュニティ・デザインへの実践的提案
——集落ソーシャルワーカーの導入 141
 - 6 新しいコミュニティ・デザインに取り組む
研究者に向けて——民衆的アプローチ 144
 - 7 おわりに——尊厳ある縮退同好会への誘い 146
- 第5章 集落のレジリエンスを高めるには 山口洋典 148
- 1 地域の一人を1として捉えない 148
 - 2 過疎戦略から適疎受容へ認識を転換する 152
 - 3 過去の災害復興過程に学び被災地間をつなぐ 156
 - 4 個人の行為の集合化を経て地域が湧活する 163
 - 5 集落のレジリエンスが高まるには 170

第6章 集落の価値を高め磨くツールとは？ 大和田順子 176

- 1 はじめに——交流力×地域力 176
 - 2 世界農業遺産とは 178
 - 3 「SDGs 未来都市」 180
 - 4 みなべ町の過去・現在 182
 - 5 みなべ町の未来 196
 - 6 おわりに——世界農業遺産、SDGs 未来都市の枠組みの活用 203
- column 03
元気になる地域 花戸貴司 206
- column 04
縮退／縮充は、誰が決めるのか？ 松原永季 212

第3部 現代的な共同性／公共性の創造はいかにして可能か？ 223

第7章 「異なる価値観の共存」を実現する生活空間の構築 高田光雄 224

- 1 はじめに 224
- 2 コミュニティおよびコミュニティ・デザイン概念 225
- 3 京都の「まちづくり」に学ぶコミュニティ・デザイン 228

| | | |
|-------------------------------|----------------------------------|-----|
| 4 | コミュニティ・デザインの課題——異なる価値観の共存 | 232 |
| 5 | コミュニティ・デザインの仕組み——タイトでオープンなコミュニティ | 237 |
| 6 | コミュニティ・デザインのプロセス——シナリオ・アプローチ | 240 |
| 第8章 共同性を育む文化的実践とは？ 弘本 由香里 248 | | |
| 1 | はじめに | 248 |
| 2 | 前提そのものの揺らぎ | 250 |
| 3 | 共同性は崩壊しているのか？ | 253 |
| 4 | 再帰性を内包した文化的実践へ | 257 |
| 5 | 一つの実践は何を物語るのか | 262 |
| 6 | おわりに——市民的公共性の土壌を耕す | 275 |

| | | |
|------------------------------|------------------------------|-----|
| 第9章 共同性と公共性を架橋するには 前田 昌弘 278 | | |
| 1 | 共同性の変容——文化を担う「私たち」とは誰か？ | 278 |
| 2 | ポスト・ヒューマンな公共性——人と環境のやりとりからみる | 281 |
| 3 | 文化のせめぎあいを記述する試み | 287 |
| 4 | 「私」の表現が共同性と公共性をつなぐ | 299 |

| | | |
|---------------|---------------------------|-----|
| column 05 | ルーズプレイス——目的から自由になる、アサダワタル | 304 |
| もうひとつのコミュニティ論 | | |

| | | |
|-----------|--------------------------|-----|
| column 06 | 学校跡地を活用した「いくのパーク」の挑戦 宋 悟 | 314 |
|-----------|--------------------------|-----|

終章 座談 —— 実践的研究へ

| | |
|-----------------------------|-----|
| 高田光雄 × 渥美公秀 × 山口洋典 + 弘本 由香里 | 324 |
|-----------------------------|-----|

| | |
|------|-----|
| あとがき | 343 |
|------|-----|

| | |
|------|-----|
| 参考文献 | 363 |
|------|-----|

| | |
|-------|-----|
| 執筆者紹介 | 365 |
|-------|-----|

あとがき

コミュニティ・デザインへの着眼

本書において、コミュニティ・デザインの定義や位置づけは必ずしも一致していない。何を指してこの概念を用いているのかも、また一致していない。本書の「まえがき」でも記したとおり、本書の執筆者の多くは長年にわたって同志社大学大学院での講義を共同担当しつつ、その準備のために研究会も重ねてきた。それでも収斂しゅうれんされなかった。しかし、コミュニティ・デザインという概念に、何かしらの可能性／方向性を見出してきたことは一致している。

コミュニティ・デザインは、まちづくりと並び立つ形で二〇世紀終盤から普及していったものである。まちづくりは、行政用語である都市計画／都市開発への対抗概念として生み出されて浸透していった。まちづくり概念を提唱した田村明は、その著書『都市プランナー田村明の闘い』（学芸出版社、二〇〇六年）の冒頭で、都市計画は「官僚的でハードの、それも部分的なものに限定されていた」と指摘した上で、「専門用語であるよりは市民用語」としてのまちづく

りを導入したと述べている。また、『まちづくりと景観』（岩波新書、二〇〇五年）では、「まちづくり」が都市計画／都市開発と異なる点として、「(1)市民主体・(2)総合性——ハードとソフト・(3)画一性から個性へ・(4)量から質へ・(5)生活の小単位尊重・(6)理念から実践へ」を挙げている。コミュニティ・デザインへの着眼／導入もまた、従来のまちづくりの理論や実践を批判的に発展させていくものだったと言えるのではないだろうか。コミュニティ・デザインが世の中で幅広く知られ普及した契機は、山崎亮の著書『コミュニティ・デザイン』（学芸出版社、二〇一一年）によるという見方に異が唱えられることは少ないだろう。同書の副題「人がつながるしくみをつくる」が端的に表すように、コミュニティ・デザインにおいては、コミュニティ・デザイナーが主役ではなく、人間関係がデザインされるコミュニティのメンバー（コミュニティ・デザイナー）に関心が向けられている。よりよい地域へと導く構想が描かれ、実現するためには、担い手の主役となる住民らの人間関係がよりよいものとなる必要があるからである。こうした観点はまちづくりの中でも示されていた。しかし、まちづくりに対してコミュニティ・デザインが新鮮な印象をもたらしたのは、地域の問題解決を重視したことにある。

折しも同書が刊行されたのは、人口減少が現実のものとなり、いわゆる「消滅可能性自治体」をめぐる議論や、東京一極集中による極点社会化、さらには東日本大震災を経て減災をはじめとした地域のレジリエンス向上が社会課題として指摘されていた頃である。これらの課題は特定の地域に限られるものではない。むしろ構造的な問題群となって地域の暮らしや仕事に複雑に絡み合うものとなっていた。従来とは異なる形での地域の問題を解決していくことへの関心が、否応にも高まっていたのである。

つまり、コミュニティ・デザインにおいて「人がつながる」ことは、目的ではなく手段である。つながった人々どうしで地域内の価値や発展に対する共通認識がもたらされることによって、問題を解決する市民活動が促進される点に、コミュニティ・デザインの意義が見出されたのであろう。

一人ひとりのフォローシップの発揮へ

まちづくりでは住民のリーダーシップが期待されてきた。コミュニティ・デザインではコミュニティ・デザイナーによる住民らの主体性を喚起する仕組みづくりが期待されてきた。そうした流れを捉えた上で、本書では地域の住民らのフォローシップに重点を置いている。リーダーシップの実践が目標の達成や集団の維持だとすれば、フォローシップの実践はリーダーの特性を補完することにある。例えば、住民のリーダーが地域活性化の仕掛け人となって、自らがやりたいことやできることを率先して行っていく姿は、容易に想像ができるだろう。そうしたリーダーシップが力強く積極的に発揮された際、特定の個人に地域の未来が左右される状況に陥る可能性がある。率先した行動によって地域内でリーダーが孤立することも考えられる。そ

のような状況を回避するため、地域に根ざす新たな仕組みを構想／設計していったのが、コミュニティ・デザインの実践であった。

本書では、こうした実践の先を見通す「新論」として、コミュニティ・デザイナーにも依存しない形を考えていった。地域内外の人々の地域への思いに応えて、日々の暮らしや仕事の中で自分にできることを少しずつ重ね合わせていく。そうした行為に踏み出していくような、一人ひとりの市民としての自覚や責任を問い直すものとして本書はまとめあげられている。

旧論／新論の二分法を超えて

もっとも、「新論」だからといって、これまでの実践や理論を否定するものではない。むしろ、これまでの蓄積をつぶさに見直すことを通じて、継承すべきものを明らかにしたり、過去の対話を通じて「新たに作る」事柄を見出していったりすることを目指している。だからこそ本書では、歴史的・文化的な観点から地域コミュニティに向き合っているいくつかの実践を事例に取り上げており、また執筆者も新旧世代が混交する一冊となっている。新論という言葉が冠した本書が、吟味のための対話を進める一助となり、読者の方々の手によって、新論の続きが編まれていくことを期待したい。特に本書では、ジェンダーや地域経済の視点など、重要にもかかわらず十分に検討／言及できていないところがある。これらは今後の課題として共有したい。

新論を編んでいく際、私たちは、問題解決の切迫性から具体的な手法や技術に関心を寄せやすい。しかし、実践者の姿勢に関心を寄せることの方が重要だろう。コミュニティ・デザインの現場は常に現在進行形だからである。コミュニティ・デザインの実践は、特定の手法を導入すれば螺旋階段を登っていくかのように、成功への道を辿っていくものではない。むしろ、周囲からは試行錯誤を繰り返していると思われるかもしれない中で、深い洞察と慎重な取捨選択が行われている。そのプロセスにどう向き合うのが、現場では問われている。例えば、令和六年能登半島地震では、発災から時間が経過すればするほど復興の道筋が見えないという事態に直面させられたり、発災当初には「ボランティア自粛論」によって誰かの何かを寄り添い支えることが否定されて「行かなくてもできる支援」ではなく「行かないことが支援」という言説が登場したりするなど、これまでのまちづくりやコミュニティ・デザインの論理では説明が困難な状態が広がり、試行錯誤のただ中に置かれている。そうした困難な現場でもにも悩む姿勢を、私たちは大切にしていきたい。

最果ての地から道なき道を拓く

最後に、二〇二二年三月に同志社大学大学院総合政策科学研究科を定年退職され、本書を監

修いただいた、新川達郎先生に御礼申しあげたい。分野にも主張にも広がりがあり、まとまりを成すことが難しい筆者らが、ばらばらにならずに、ゆるやかにつながり続けられているのは、新川先生の懐深さなくしては考えられない。侃侃諤諤かんかんがくの議論があっても、新川先生が最後の総括でこれから向き合うべき方向性を指し示されて、私たちは包み込まれていった。

編集協力として多大なるご尽力をいただいた大阪ガスネットワーク株式会社 エネルギー・文化研究所にも御礼申しあげる。同研究所の方々のご理解と多面的な協力のもと、私たちは同志社大学大学院での講義と、それに関連する研究会活動に取り組むことができ、今回の出版にあたっても力強くお支えいただいた。特に、弘本由香里さんの献身的な働きへの感謝の念は尽きない。

また、執筆者の背景には数多くの関係者の方々がおられる。各論考は、そうした方々との対話や協働、支援や励ましによって支えられていることを覚えてほしい。一人ひとりのお名前は挙げられないが、執筆者を代表してここに謝意を表する。

本書の刊行に向けて奔走いただいた、さいはて社の大隅直人さんにも感謝申しあげる。それは、出版をめぐる状況が厳しい中でお引き受けいただいたからだけではない。コミュニティ・デザインという言葉に冠した本をなぜ今出版するのか。このメンバーが筆を執ることにどういう意味があるのか。これらの問いを正面から投げかけ、その答えとして相応しい構成を組み立てていくにあたって、誠実な対話を重ねていただいたからである。本書が持つ意味を共に紐解

くだけでなく、紡ぎ出していただいた。それらを一冊の本へとまとめ上げることができたのは、デザイナーの早川宏美さんの参加があつてこそである。実践の現場に足を運ばれ、はかなく小さな声の尊さ、言葉にならない想いの深さ、見えないつながり、まちの包容力やダイナミズムを柔らかな感性で受け止めてくださった。そうした時を重ねて、素晴らしいイメージの結晶を生み出され、本書に命を与えていただいた。組版と図版作成を担当いただいたTSスタジオの田中聡さんには、タイトなスケジュールの中で、正確かつ丁寧な仕事をしていただいた。この素晴らしいチームに深く感謝申しあげる。

同志社のキャンパスから程近い烏丸今出川にある居酒屋で講師陣と受講生らと混ざってコミュニティ・デザインの談義を重ねた際、大隅さんから「さいはて社」という社名にしたのは「最果ての地から道なき道を拓いていくことに意味がある」からと伺った。本書が、地域社会の歴史や文化が次世代へと継承され、よりよい未来を拓くための知恵をもたらす一冊となるべく、多くの方々の手が届くことを願ってやまない。

山口洋典・川中大輔

執筆者紹介

新川 達郎
(にいかわ・たつろう)

総合地球環境学研究所客員教授
同志社大学名誉教授

川中 大輔
(かわなか・だいすけ)

龍谷大学社会学部准教授
シチズンシップ共育企画代表

弘本 由香里
(ひろもと・ゆかり)

大阪ガスネットワーク株式会社
エネルギー・文化研究所特任研究員

筒井 淳也
(つつい・じゅんや)

立命館大学産業社会学部教授

原 めぐみ
(はら・めぐみ)

和歌山工業高等専門学校准教授
Minami こども教室実行委員長

北川 美里
(きたがわ・みさと)

一般社団法人京都わかかさネット事務局長

渥美 公秀
(あつみ・ともひで)

大阪大学大学院人間科学研究科教授

山口 洋典
(やまぐち・ひろのり)

立命館大学共通教育推進機構教授

大和田 順子
(おおわだ・じゅんこ)

OCC 教育テック総合研究所上級研究員
地域力創造アドバイザー (総務省)

花戸 貴司
(はなと・たかし)

東近江市永源寺診療所所長

松原 永季
(まつばら・えいき)

有限会社スタジオ・カタリスト代表取締役

高田 光雄
(たかだ・みつお)

京都美術工芸大学副学長・大学院研究科長・教授
京都大学名誉教授

前田 昌弘
(まえだ・まさひろ)

京都大学大学院人間・環境学研究科准教授

アサダ ワタル
(あさだ・わたる)

文化活動家, 近畿大学文芸学部専任講師

宋 悟
(そん・お)

NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと理事・事務局長

コミュニティ・デザイン新論

2024年9月9日 第1刷発行

新川 達郎 監修

川中 大輔・山口 洋典・弘本 由香里 編

編集協力

大阪ガスネットワーク株式会社 エネルギー・文化研究所

発行者 大隅 直人

発行所 さいはて社

〒525-0067 滋賀県草津市新浜町8-13

TEL 050-3561-7453 FAX 050-3588-7453

MAIL info@saihatesha.com WEB <https://saihatesha.com>

組版者 田中 聡

装幀者 早川 宏美

印刷所 共同印刷工業

製本所 新生製本

Copyright ©2024 by Tatsuro Niikawa, Daisuke Kawanaka,

Hironori Yamaguchi, Yukari Hiromoto

Printed in Japan

ISBN 978-4-9912486-5-8